

RRS導入を目指した院内急変時対応の取り組み

自治医科大学附属病院

救命救急センター主任

急性・重症患者看護専門看護師 谷島雅子

発表概要

第17回日本臨床救急医学会学術集会に発表したものに、少し加筆した内容を述べさせていただきます。

当施設は、1132床の大学病院で、年間在院患者延数は約33000人です。急変時に関しては、教育を行ってきましたが、年間の急変事例発生数や、急変時に適切な対応が出来るのかの検証はなされていませんでした。そこで、医療安全全国共同行動目標6に取り組むべく対応策を検討し、平成21年6月から医療安全対策部に院内急変対応ワーキンググループを立ち上げ、組織的に急変事例の検証を行いました。

平成22年度から4年間の活動を経年的にまとめた結果、様々な問題点が明らかになりましたが、その対策として、各部署に「事例の振り返り」と称し教育的関わりを実施しました。平成22年度には急変事例の80%に問題となる対応が認められていましたが、2012年度には43%と減少し平成24年度には20%まで減少できました。入院患者における予期し得ない突然の状態悪化から医療事故に発展するリスクに対応するためには、予防という観点から初期対応をどのように教育すべきかが必要であり、それには、BLSやICLSなど心肺蘇生教育の集合教育以外に、実例を検証し問題点を把握した上で振り返る、個別（部署）教育が有用であると考えられました。

急変の6～8時間前にとらえられるべき何らかの徴候に気づかず、心肺停止などの重篤な状態になってからの対応には限界があることは指摘されています。海外の報告では、看護師がRRT/RRS導入に対して好意的な印象をもってると報告していますが、国内からの報告では、業務上の心理的負担の軽減には有意差はでていないという指摘もあります。RRSの構築を目指す上で、看護師の役割は大きいと思われます。急変対応する現場での葛藤を理解しつつ、少しでも看護師の心的負担を軽減できるように関わる必要性があります。今後も、教育体制の充実を組織的に考え、RRS導入による効果が実感できる関わりを目指したいと思えます。